

エリザベス朝道徳劇とプロテスタント聖人の誕生¹

井 出 新

近年、シェフィールド大学のデイヴィッド・ローズ教授を中心に、*Acts and Monuments*の校訂版を作るプロジェクトが進められ、その一環として、ジョン・フォックスの歴史叙述を様々なコンテキストから捉え直し、そこからイギリス宗教改革後の文化全体を再考するという試みが盛んに行われている。² 殉教史“martyrology”という視点は近代初期イギリスの演劇研究においても極めて有用なはずなのだが、殉教史と演劇との関係性を扱ったこれまでの研究はそれほど数多くはない。そこでこの論文では、殉教史という観点から十六世紀イギリスの演劇、とりわけ道徳劇と殉教史の創造的かつ相互補完的關係性を概観し、殉教史がエリザベス朝演劇の誕生と興隆に果たした役割を考察してみたい。

I

殉教史と演劇の関わりはジョン・フォックス全盛のエリザベス一世治世下に始まるわけではない。むしろその歴史は少なくとも聖人の生涯や殉教を扱った中世の聖人劇にまで遡ることが可能である。殉教聖人を描く劇は、中世からルネサンスにかけて数多く残され、聖人劇に纏わる記録は、道徳劇や聖体劇のそれを遥かに凌いでいる。³ これは聖人劇が教区や地方自治体において非常に人気があったことを示唆するが、その人気を支えていたのは、聖人や聖遺物に対する人々の崇敬であり、聖人を間近に見て触れることで彼の属性にあずかるという、いわば視覚・触覚重視の信仰心だった。そういう信仰は、聖人に纏わる聖遺物や図像、及び祝祭には必要不可欠なものであったし、視覚的な聖人物語を通して、人々は共同体として聖人の聖性に与り、宗教的なレベルで広く社会（そして死者の世界）と結び合うことができた。⁴ 聖人の殉教物語こそ、人々のメンタリティーを深く支配する伝統的な文学形式だったと言えるかもしれない。

宗教改革後、プロテスタントの聖職者や国教会が直面した問題は、まさに人々

の間に根深く残る聖人伝や聖人劇に対する執着心であった。⁵ イングランドにおける宗教改革の苛烈さは、その運動がカトリック的旧習を全面的に廃絶することを目指していたような印象を与えるが、しかし実際は必ずしもそうではない。例えば1530年代から40年代にかけて、宗教改革者ジョン・ベイルは、マーク・ブライトンバークが述べているように、聖人崇拜と聖人劇の両面においてプロテスタント的開拓に着手した宗教改革者だったが、彼のような筋金入りの改革者にとっても、聖人崇拜のすべてが廃絶されるべきものではなかったのである。⁶

目標は廃絶よりも無毒化にあった。その基本的戦略は、人々の注意を聖人殉教者その人ではなく、殉教者が英雄的行為によって命を賭して伝えたキリスト自身に向かわせることである。換言すれば、聖人の視覚的で触覚的な「身体」それ自体から、神の栄光のための英雄的な「行為」“acts”に重きが置かれるということになろうか。ここにドラマが生まれる。聖人の奇跡的な身体を描く活人画から、奇跡的な「行為」を描くドラマへ。ベイルはカトリックの聖人崇拜の手法を領有し、それをプロテスタント教理で無毒化しつつ、新たな聖性を帯びたプロテスタント聖人のドラマを成型していった。

実際、ベイルがプロテスタント殉教者として描かれる *King Johan* や *Johan Baptystes* などの道徳劇制作に携わったのは、彼が妻と家族を連れて大陸に亡命していた1540年代、まさに彼がプロテスタント殉教史の制作に没頭していた時のことだ。ベイルは *Image of Both Churches* (Antwerp, c.1545-48) で聖職者ウィックリフとフスの迫害を取り上げるが、さらに *A Brefe Chronycle concernynge the Examinacyon of Syr Johan Oldecastell* (Antwerp, 1544) ではサー・ジョン・オールドキャッスル、また *The First Examinacyon of Anne Askewe* (Wesel, 1546) 及び *The Lattre Examinacyon of Anne Askewe* (Wesel, 1547) ではアン・アスキューと、立て続けに俗人プロテスタントの殉教史も手がけている。こうしたベイルの仕事が1548年の帰国後、彼と一緒に暮らしていたジョン・フォックスの手本となったことは周知の事実だが、⁷ こうしてみると、1538年から39年にかけてのクリスマスにカンタベリー大主教トマス・克蘭マーの屋敷で上演された *King Johan* は、たまたまジョン王をプロテスタント殉教者に仕立てた芝居だったわけではなく、むしろベイルによるプロテスタント聖人伝の先駆けだったことがわかる。⁸

ところでベイルのプロテスタント殉教史は、イングランド宗教改革後にプロテ

スタントたちが独自の画期的な歴史叙述を行い始めたということを経ずしも意味しない。ペイルには模倣すべきパラダイムがあったのだ。すなわち中世カトリックの聖人伝である。ペイルはカトリックの聖人伝或いは聖人劇の伝統に対して、その手法を占有しながら、プロテスタントの教理を反映させたそれを成型する試みを行った。そこでは国王、聖職者、労働者、誰もが神の前に等しく殉教者となり聖人となりうる。しかも彼らが聖人となるのは、身体の奇跡的な変化によるのではなく、信仰による勇敢な行為によってなのだ。カトリック聖人伝をプロテスタント抵抗勢力の拠り所、或いは推進力として占有していく営みにおいて、ペイルはプロテスタント演劇の礎石を築いたと言っても過言ではない。

ジョン・フォックスがプロテスタント殉教者のエピソードを編纂し、*Acts and Monuments* を出版したのはメアリー一世による迫害をくぐり抜けて数年経った1563年のことだったが、カトリック聖人の代替物を作り出すプロジェクトにおいて、フォックスもペイルと軌を一にしていた。*Acts and Monuments* に窺える聖人は、カトリック聖人伝に見られるように、身体に神秘的な力を帯びていたり、聖人をめぐって奇跡的出来事が起きるような、特別な人物ではない。むしろ万人祭司説に似て、国王、貴族、聖職者、ジェントリー、労働者の誰もが男女の区別無く聖人として登用される。しかもプロテスタント聖人が何によって新しい聖性を得るかと言えば、それは身体の神秘や奇跡ではなく、身体の苦悶、しかも終末論的な苦悶による。換言すれば、強大なカトリック＝反キリストの勢力が、「真の教会」に属する少数派プロテスタントを迫害し、彼らの身体に凄惨な暴力を加える、その苦しみを通してなのである。⁹ 勿論そこにはセンセーショナリズムの入り込む隙も生まれつつあるが、その終末的な試練と苦しみを乗り越え、死によってキリストへの信仰を証明する者だけがプロテスタントの殉教聖人と認められ、しかもその聖人はカトリックの聖人劇や図像の場合と同様、大きな社会的影響力を帯びる。つまり *Acts and Monuments* の活字と銅版画で描かれる殉教聖人たちによって、読者は新たな聖人の聖性に共に与り、政治・宗教的なレベルで広く結びあうことになったのである。¹⁰ 亡命者という周縁的立場を経験したペイルやフォックスにとって、この新たな聖性を帯びた殉教聖人こそ、彼らの政治的抵抗の拠り所となっただけでなく、エリザベス朝の国家形成に大きな役割を果たすことになった。

これに対してカトリックサイドも聖人殉教者の再生産に余念がない。¹¹ 例えば1585年にカトリック支配圏に入ったアントワープでは、教会やホールにカトリック信者の殉教や拷問を題材にした絵画が頻繁に、しかも非常にリアルに描かれるようになっていたという。この時期、フランドル地方では反宗教改革運動が上昇気流に乗り、修道会が数多く再興され、特にイエズス会のすさまじい宣教活動がファーニーズ枢機卿により奨励されていた。したがって殉教図や拷問図の量は、デイヴィッド・フリードバーグが指摘しているように、反宗教改革運動の宗教教育プログラムの一環として現れたという面が大きい。¹² 絵画による殉教の視覚化、肉体化は、絵を見ている者の感情に直接的に訴えて、宣教運動への協力や必要性を痛感させるという政治的・教育的目的を有していたため、17世紀初めにフランドル地方のカトリック支配が安定してしまうと、次第に殉教図も描かれなくなっていく。

リチャード・ヴァーステガンの *Theatrum Crudelitatum Haereticorum* がアントワープで出版されたのもちょうど同じ時期だ。¹³ ヴァーステガンはイングランドで拷問を受け、処刑された数々のカトリックを、フォックスの図版とは違い、非常にリアルなタッチで描いている。(図版1) さらに彼は巻末でメアリ・スチュアートを新たなる殉教者として描くことで、イングランドのプロテスタント国家形成に痛烈な批判を加えているが、(図版2) こういう殉教者の視覚化も政治的意図による。同じ頃、ローマのイエズス会英国人神学校のチャペルに掛けられていた多くの殉教図も軌を一にする。その様子はジョヴァンニ・バッティスタ・デ・キャヴァリエリによる銅版画で知ることが出来るが、¹⁴ 聖ジョージなどの聖人に並んで、渡英宣教師エドマンド・キャンピオン(図版3)やトマス・コタム(図版4)を描いた衝撃的でリアルな殉教図は、神学校のチャペルに出入りする聖職者や神学生たちだけでなく、ローマ市民たちも目にしていただろう。それを見てイギリスから亡命してきた神学生たちは祖国への使命感に燃え、市民たちは多くの献金を捧げて神学校や宣教師を支えるよう促されたのである。¹⁵ このようにフォックスの殉教史はカトリックによる反プロテスタント殉教史に火を付け、両サイドが政治的目的のために殉教聖人と殉教史を闘ぎ合いながら占有するという、様々なレベルでの言説による宗教闘争へと双方を駆り立てていくことになる。

話をイングランドに戻すが、絵画と同じくらいに視覚的なメディアである演劇

においても、殉教聖人を作り直す試みはベイル以降着実に続けられていた。例えばルイス・ウェイジャーの *The Life and Repentance of Mary Magdalene* (1566-67年出版) はその良い例だが、しかし *Acts and Monuments* が次々と版を重ねたのに比べ、演劇においてはプロテスタント殉教聖人の再生産に翳りが見えはじめる。というのは、60年代まで聖職者やアマチュア劇作家がプロテスタントの聖人劇を試みていたにもかかわらず、ロンドンに劇場が建設される70年代になると、ロンドン市当局の主導する反劇場主義興隆の煽りもあって、教会が演劇というメディアを使用することに警戒感が強まるからである。¹⁶ とは言え、殉教聖人に対する愛着が人々の間からなくなったわけではない。それどころか、いまだに視覚・触覚重視の信仰から抜け出せない人々はまだ多く存在していたために、ここからある種の奇妙な先祖返りが始まる。

当時の反劇場主義者たちが指摘するように、エリザベス朝の劇場は観客の視覚や触覚に訴えて、彼らの感情をコントロールする力を獲得し、それを積極的に利用し始めていた。¹⁷ しかも大学教育を受けた才人たちの登場によって、身体や心情を表現する豊かなレトリックを演劇は獲得していたのである。ここに至って劇場は「行為」もさることながら、新しい形で人々の「身体」への視覚的・触覚的欲望を満たす空間へと変質しはじめる。例えばクリストファー・マーロウの *Tamburlaine the Great* (1587年上演) において、我が子に向かって自分の生傷に触れるよう促すタンバレイン大王は言わば聖人であり、弟子のトマスに十字架上での傷に触れるよう促すイエス・キリストを彷彿とさせる。これを演劇の世俗化、或いは再カトリック化と形容することは可能かもしれないが、むしろ見方を変えれば、演劇が再び新しい聖性を帯びた聖人を模索しはじめたということなのかもしれない。壮絶な死を遂げる英雄であれ大悪党であれ、その属性として不可欠なのはある種の聖性だからである。

プロテスタントとカトリックの双方から殉教者物語が次々と生産されることによって、それが飽和状態に達し、一枚岩的な歴史を描くことができなくなると、殉教者の真正性や聖性自体は意味を失う。劇場のレベルでは、そういう現象がすでに非常に早い段階から起きており、演劇は新しい聖人的英雄を模索する必要に迫られていた。90年代から盛んに上演されるようになる殉教者を扱った一連の歴史劇はその良い例である。¹⁸ 演劇は、フォックスが様々な社会階層からプロテ

スタント殉教者を創造したのと同じように、様々な形の聖性を帯びた英雄を創造していった。それは宗教＝政治的レベルにおける聖性だけではなく、愛とか憎しみの感情的なレベルや、或いは状況倫理的なレベルにおける聖性まで含まれるが、こうして演劇は殉教史を自家薬籠中のものとして利用する一方で、殉教史の持つ宗教的熱狂というエネルギーを次第に失っていったのである。¹⁹

1590年代ぐらいまでの演劇史的流れを考えると、殉教史と演劇との関わりが明らかに70年代で大きく変化することに改めて気付かされる。劇場がしばしばカトリック的・偶像崇拝的な娯楽施設であるとして批判に曝されるようになった頃、明らかに劇作家たちは、表面的にはプロテスタント国教会の意図を反映しつつも、実際はそこから逸脱するような形で、新しい種類の聖人劇に着手しはじめている。彼らはそれぞれ、自らが繋がる政治的或いは宗教的人脈の影響、また読者・観客などの影響を受けながら、殉教史の言説に特殊な捻りを加えつつ、それを様々な目的のために作りかえ、再利用する。特に大学出の劇作家達は、視覚的なリアリズム、或いはセンセーションリズムを観客に提供している。エロティックな身体表象、或いは身体の苦しみや身体への暴力による主体構築という、本来の方向性から逸脱したやり方で殉教史は再利用されていたのである。

それでは1570年代の道徳劇、言わばベイルが生んだプロテスタント道徳劇の末裔は、どのような捻りを加えられることになったのか。我々はとすれば、道徳劇だけは本来のプロテスタント国教会の政治目的にかなって用いられていたと考えがちである。しかしながらその道徳劇でさえ、70年代に大きく様変わりをしたように思われる。つまりこの頃の演劇は、ベイルやフォックスが扱ったような形では、もはやプロテスタント殉教者を舞台に載せることが出来なくなっていたのではないかと。そこで次に、ナサニエル・ウッズの道徳劇 *The Conflict of Conscience* を通して、その点を具体的に考察してみたい。

II

ベイルやウェイジャーなど聖職者による新しいプロテスタント聖人劇が1560年代で終息し、反カトリック・インターロード自体も衰退の一途を辿っていることを考えれば、「ノリッジの牧師ナサニエル・ウッズにより書かれた」*The Conflict of Conscience* (1581年出版) は、²⁰ 演劇史的にかなり時代遅れの感が否

めない。彼がノリッジ近郊の村サウス・ウォルシャムで牧師を勤めていたのは1572年6月から1580年2月までだから、執筆は少なくともその間と考えられる。²¹年代的にというだけでなく、執筆場所がノリッジという点でも、この劇は60年代プロテスタント道徳劇の延長線上にあるよりはむしろ、これまでの道徳劇と一線を画す突然変異と考えた方が説明しやすい。²²

そうした見方を裏付けてくれるのは、従来この劇がしばしばマーロウの『フォースタス博士の悲劇』や『リチャード三世』などに通じる、カルヴァン主義的な「神学的絶望」をテーマにした劇と考えられてきたという事実である。²³ この指摘自体は決して見当はずれではなかろう。実際 *The Conflict of Conscience* の場合、直接の材源となった『ガリバルディ博士の書簡』の関心は殆どスパイアラの絶望と心の葛藤に向けられているし、その材源の巻末には「絶望予防法」なる指導書も付されている。ウッズはそれを見事に劇化して、エリザベス朝悲劇に共通するような悲劇性を主人公に与えたのである。²⁴

しかしこの劇で主人公の絶望的葛藤が描かれるのは、実は四幕も後半になってからで、全体に占める割合としては決して大きくはない。むしろ劇全体としてみると、大きな比重が置かれているのは、モデルとなった実在の法律家フランシス・スパイアラ（劇中ではフィロロゴス）が枢機卿によってカトリックへの転向を余儀なくされる部分であることがわかる。しかもその部分に関する記述は種本には殆ど見あたらず、スパイアラが迫害によってカトリックに改宗する記事は数行で簡潔に述べられているのみだ。²⁵ つまりウッズは材源に存在しない迫害場面を大幅に書き加えたことになる。

書き加えた部分に実は別の材源が存在するという指摘がある。特に枢機卿がフィロロゴスを尋問する場面について、レズリー・オリヴァーはウッズがフォックスの *Acts and Monuments* を参考にした可能性があると言うが、彼の根拠はそれが材源と断定できるほど直接的なものではない。²⁶ ただ少なくとも確実だと思われることは、ウッズが書き加えた部分に、フォックスの殉教史的なヴィジョンやレトリックが持ち込まれているということだ。実際それは第一幕から明確な形で認識することができる。劇の冒頭でフィロロゴスとマテーティスは、真の教会が受けるべき苦しみについての議論を行い、その例証として創世記のアベルからキリストに至るまでの殉教記事、そして弟子たちの殉教へと話を展開させる。

James vnder Herod, was headed with the Sworde,
The rest of the Apostles, did suffer much turmoyle:
Good *Paul* was murdered by *Nero* his worde:
Domitian deuised a Barrell full of Oyle,
The body of *Iohn* the Euangelist to boile:
The Pope at this instant sondrie tormentes procure,
For such as by Gods holy word will indure.
By these former stories, two things we may learne,
And profytably recorde in our remembraunce:
The fyrst is Gods Church from the Diuels to discerne:
The second to marke, what manyfest resistaunce,
The Trueth of God hath, and what incombraunce. (186-99)

そしてこの後、創世記から連綿と繋がる殉教史に学ぶべき事柄が示される。それは神の教会は苦難に遭うことが定められており、その苦しみによって神に属する者と悪魔に属する者とが峻別されるということであり、逆に言えば、キリストと同じ迫害の苦しみを受けることが神に属する証しであるということなのだ。

こうしてみると、劇の前半から後半にかけて、フィロロゴスへの迫害が長々と描かれることには、劇として重要な意味が存在するように思える。苦悶を耐え忍んで神に属する者であることを証明するのか、或いはその苦しみに耐えきれず、安楽を手に入れて、滅びに至る者であることを露呈してしまうのか、劇の主眼は主人公の殉教者的確信に置かれている。登場人物のテオロゴスが「ペテロが述べたように、行いによってあなたの選びを確かなものにしなさい」(2281-82)と述べている通り、この劇の神学は、信仰義認よりも善行義認に強調点が置かれており、カトリックの脅しや誘惑を受ける主人公フィロロゴスには、苦難を通して殉教者となり得る可能性が最後まで残されている。²⁷ 種本の『ガリバルディ博士の書簡』でスパイアラは「遺棄された者に対する神の天罰と怒りを世に知らしめるための例証」であり、救済の望みのない悪人であるが、²⁸ この作品ではプロテスタント聖人のモデルに相通ずる英雄性が与えられているのだ。その点で、この劇

は新しい聖人劇とみることができるかもしれない。

フィロロゴスの殉教聖人的なレトリックが大きくクローズアップされるのは、彼が異端審問に引き出される四幕一場であろう。この場面では500行にも及ぶ枢機卿らとの長いやり取りが描かれる。討論で扱われるのは *Acts and Monuments* でもお馴染みのテーマ、教皇の主権や化体説であるが、²⁹ 興味深いのは討論の内容そのものよりも、フィロロゴスが「良心」を拠り所として枢機卿の尋問に対抗するという点だ。例えば尋問においてフィロロゴスが「もし良心に逆らえば、永遠に魂を殺してしまうことになる」と告白し、或いは「私の良心が大声で、地上の富以上に神を愛するよう命じている」と述べるように、あたかも彼の良心は、自分自身をコントロールする一種の人格のように描かれている。実際、劇の後半では「良心」という人物が登場し、彼は善悪の判断を行う心の働きの象徴というよりはむしろ、神と人とを結ぶ「インターフェイス」のような役割を担っている。³⁰ 「良心」はいわば神の意志を伝える代理人ということになる。したがってフィロロゴスにとっては、国家（或いは教会権力）より良心（或いは神の声）に従うことの方が重要であり、良心への服従が自らの正当性を、そして同時に迫害する側の悪魔性を、証明する根拠となっているのだ。この傾向は *Acts and Monuments* のプロテスタント聖人にも共有されており、³¹ 彼らの聖性は良心に従う苦しみによって純化されるのである。

ところでウッズがフィロロゴスの殉教者的側面を際立たせる理由はどこにあるのだろうか。本来、歴史上のスパイアラは背教者であり、完璧なプロテスタント聖人として描くことは不可能だろう。しかし敢えてそこに殉教者的側面を持たせると、大きな落差が生まれる。つまり劇の全体的構図は、永遠の救いを手中にしていたはずの聖人が、ひとたび良心を裏切っただけで一転、永遠の滅びに落ちるというもので、ウッズが意図していたのは、おそらくこの落差だった筈だ。殉教者の栄光から背教者の絶望へという落差に、彼は教育的な価値を見いだしているのである。したがってこの劇は、聖人になれなかった聖人、言わば「殉教者くずれ」の反聖人劇であり、家族や安楽な生活のために自らの聖性を失わぬよう、パウロやキリストの苦しみに倣うよう訴える劇なのだ。

Whereby they seeking God to please, did bid the world adue:

Wife, Children, and possessions forsaking, for they knew
 That euerlasting treasures were, appointed them at last,
 The which they thirsting, did from them, al worldly pleasures cast.
 (1835-38)

観客の殉教者的な熱心を鼓舞するためには、その熱心に駆り立てられた英雄、もしくは正反対の汚れた英雄がどうしても必要になる。人々の熱心を煽る急進主義的な過激さという点で、ウッズは従来のプロテスタント聖人劇と袂を分かつように思われる。

それにしてもウッズがこの劇を制作したと思われる 1570 年代、すでにイングランドのプロテスタント国家形成は軌道に乗り始めていた。そんな時期、陰画のような形で殉教者的な熱心を殊更に鼓舞する必要はあったのだろうか。確かに北方の反乱（1569 年）やローマ教皇によるエリザベス一世破門（1570 年）によって、反カトリック的な言説が国内に蔓延していたことは事実だ。そういう広いコンテクストからすれば、*The Conflict of Conscience* も 60 年代のインターロードと同様、漠然と反カトリック感情を反映しているということになる。しかしこの時期、国内ではプロテスタントの迫害や殉教という可能性は事実上あり得なかったし、1570 年に出版された *Acts and Monuments* の第二版が示しているのもそのことだろう。すなわちトマス・ベタリッジが指摘するように、「フォックスがエリザベス即位後に書くべき殉教史、或いは危険をおかしてまでも書くべき殉教史はもはや存在しなかった。」³² フォックスが *Acts and Monuments* を改訂したのは、その続きを付け加えるためではなく、急速に薄れつつあるプロテスタント聖人殉教者の記憶を新しい世代に留めるためであった。そういうタイミングで殉教者的な熱心を観客に促す演劇を書くというのは甚だ奇妙に思える。そこで研究者たちはこの作品の執筆年代を 60 年代に可能な限り近づけようとする。「おそらくウッズは元々の作者ではなく、それ以前に存在した劇の編集者もしくは改訂者にしかすぎない」と推測する研究者もいるほどだ。³³ しかしここで重要なのは執筆年代を推測によって動かすことではなく、ウッズが芝居を制作したノリッジにおけるパトロネッジや地方政治という文脈に芝居を置いてみることだろう。

ノリッジ市自治体のピューリタン有力者たちとウッズとの強いつながりについて

ては、ワインも指摘するように、³⁴ ケンブリッジのコーパス・クリスティ学寮を卒業したばかりのウッズが、自治体の管轄下にある教会教区の聖職録を得たことから推察できるが、さらに最近の研究成果によって両者の深い関係は十分裏付けられる。サウス・ウォルシャムにある聖メアリ教会での聖職叙任に先立つこと約二週間、すなわち 1572 年 6 月 18 日、就職活動をしていた学生ウッズは、ノリッジの市長裁判所に姿を見せる。本人自ら市長裁判所に出頭するというのは極めて異例のことだが、市長裁判所の議事録からは、市長と長老参事会員がウッズに非常に好意的であり、教区教会を視察して「気に入れば」すぐにも聖職録を与えるという態度を示していることがわかる。³⁵

コーパスで学士号を取得したばかりのウッズが、易々とノリッジ市有力者の好意を得られたのは、おそらく大学人脈によるものだろう。ウッズがコーパス・クリスティに在学している頃、この学寮とノリッジは急進主義という一本の太い線と結ばれていた。例えばノリッジ出身のフェロー三人、すなわち学寮長トマス・アルドリッチと、アルドリッチの弟でフェローのヘンリー（この二人はノリッジで市長を務めた長老参事会員ジョン・アルドリッチの息子たちである）、そしてロバート・ウィランというフェロー、この三名はすべてプロテスタント急進主義に深く染まっていたことがわかっている。³⁶ カンタベリー大主教で、かつてのコーパス学寮長だったマシュー・パーカーは、エリザベス女王に宛てた書簡の中で、アルドリッチと学寮仲間が「私を馬鹿にして、私をランベスの教皇、コーパス・クリスティ学寮の教皇だと言っている」と憤慨しているが、それはこの三人を中心にした急進主義者たちに間違いない。³⁷

急進主義的な教員や学生はノリッジからコーパスにやって来るだけでなく、ノリッジへと集まって行く。例えばアルドリッチの肩を持ってパーカーを攻撃したコーパスのフェロー、トマス・ロバーズは、その後ノリッジへ赴き、急進主義運動の指導者となるし、また 1572 年にコーパスで修士号を取得した分離派ロバート・ハリソンは、その年、ノリッジ市長やジョン・アルドリッチらの推薦によってエイルシャム・グラマースクールの校長となる。³⁸ しかしながらハリソンは問題を起こして職を辞し、今度はノリッジ市の救護院院長となって会衆制教会を立ち上げ、そこに学寮の後輩で分離派のロバート・ブラウンが参加する。³⁹ こうしてみるとコーパスのウッズが学位取得後ノリッジへと向かい、市長裁判所の有力

者たちの好意を得るのは、アルドリッチ兄弟やトマス・ロバーズなど長老参事会員に顔が利く急進派フェローのお墨付きを得ていたからに違いない。

ノリッジの急進主義はフォックスの親友であるノリッジ主教ジョン・パークハーストによって手厚い保護政策を受けていた。ところが1572年2月にパークハーストが没すると、地方史家スミスの言葉を借りれば、「劇的な」危機を迎える。⁴⁰ マシュー・パーカーは地下組織的に行われている聖書研究会を弾圧し、或いはサープリス着用を拒否する牧師の聖職剥奪を強化していたが、それに対して、パークハーストは様々な手を尽くして抵抗し、急進派運動を支持してきた。彼の死後、エドモンド・フリークがノリッジ主教に着任すると、フリークはパーカーの期待通り、急進主義者の取り締まりを積極的に行う。もしウッズが長老参事会員のピューリタン有力者たちをパトロンにしていたとすれば、彼らの間に広がる危機感をウッズも共有していたに違いない。ノーフォークには依然として *The Conflict of Conscience* の登場人物キャコノスのような、ラテン語も神学教義もろくに理解していない聖職者がはびこっていた。またエリザベス一世のもと、カトリシズムの圧政を脱して新しい教会形成が始まったにもかかわらず、実際は国教会上層部が「信心深い信者たち」に圧力をかけるという現状もある。⁴¹ 自分たちを取り囲むそのような現実が、今まで抱えてきた宗教改革の理想と食い違うものになりつつある中で、急進派の有力者や聖職者たちは、救いか滅びか、改革か腐敗か、善か悪かという二元論的な世界観を共有し、やがて自らを周縁化し、フォックス的なレトリックを用いながら聖人殉教者として自己形成を図らざるを得なくなる。⁴²

同じような状況は80年代末、マーティン・マーブラリットに席卷されたロンドンにも見られる。マーブラリットは *Protestation* の冒頭で、国教会の主教たちをスペインの異端審問官にたとえた後、「教会改革は血を流してこそ実現され」「教会は血を流せば流すほど、命と活力を得るのだ」と述べ、さらに自分は「数え切れない逮捕令状にも、取り締まり官にも、また数々の脅しにも拷問にもうろたえない」という殉教者的な確信を吐露している。⁴³ 演劇の「薄汚い」レトリックを用いるマーブラリットは一見聖人からほど遠い存在だが、良心に服従して味わう苦しみ、そしてその苦しみに自ら進んで飛び込む宗教的な熱狂、それこそが彼に聖性を付与し、殉教者となるに十分な根拠を与える。一方カンタベリー大主教ホイットギフトも、少数派が聖人殉教者のレトリックを領有することで教会権力が

脅かされることを十分に察知していた。彼が1589年に *Acts and Monuments* 簡易版の出版という対策を講じて、過激なフォックスの緩和に乗り出すのもそのためだ。⁴⁴

殉教者のレトリックを領有し、熱狂的な確信を吐露したマーブラリットに先立つこと約10年、ウッズが *The Conflict of Conscience* で目論んだのも、迫害を受ける真の教会をノリッジの急進派に重ねることだったように思われる。この劇で殊更プロテスタント迫害者に対する警戒や殉教への覚悟が強調される理由は、まさにノリッジの急進主義者の危機意識を反映しているからに他ならない。ウッズはフィロロゴスを尋問する枢機卿、そしてその背後に控えるローマ教皇に、「コーパスの教皇」、「ランベスの教皇」を見ている。言うなればこの劇は、中世演劇の古い革袋を使いながらも、そこに急進主義という新しい葡萄酒を注ぎ入れた聖人劇なのである。ウッズは、ケンブリッジ大学における急進主義運動の熱狂を、急進主義に同情的なノリッジという環境で継承しつつ、それを伝統的な演劇の型に流し込んだのだろう。演劇形式という点ではともかく、この作品は演劇が殉教史を媒体として急進主義と結びついた最も早いケースだったのである。

以上のように我々は、比較的広い文化的コンテキスト、そして限定的なコンテキストの中で、エリザベス朝道徳劇における殉教者表象を考察してきた。道徳劇の劇作家たちは、政治的なプロパガンダとして様々な利用価値を帯びた殉教者の言説を領有しながら、*Acts and Monuments* のフォックスと同様、イングランドにおけるプロテスタント国家の形成に貢献したと考えられる。しかしその一方でナサニエル・ウッズのケースに窺えるように、少数派は抵抗運動のために殉教史を領有し、演劇に新しい急進主義運動の過激さを注ぎ込むことによって、国家形成を阻害する可能性を帯びてくる。これは道徳劇が新しい聖性を帯びた聖人を模索しはじめたということの意味する。そしてその後に興隆した職業演劇も、劇作家が相対立する歴史認識の声を舞台に乗せることで、殉教者の真正さの微妙な揺らぎを描き、結果的には政治・宗教的に一枚岩の歴史を描くことを不可能にしてしまう。こうしてみると、演劇と殉教史との緊密な関わりあいは国家形成において必ずしも有益に作用しているとは言えない。それどころか、演劇が殉教者を積極的に取り上げることで、殉教者の真正性や聖性自体が揺らぎ始め、誰が政治的な主導権を握るかによって真の殉教者がいかようにでも変わることを示すようにな

る。そういう意味で演劇は、新しい聖人劇によってプロテスタント国家という大きな枠組みの成立を支援しつつも、国家が望む方向性から大きく逸脱して殉教史を領有していったと言える。エリザベス朝における宗教と演劇の創造的な緊張関係が比較的明確に窺えるのは、まさに殉教史をめぐるこうした複雑な関係性においてなのである。

図版

Persecutiones aduersus Catholicos à Protestantibus Caluinistis excitatae in Anglia. ⁸³



Sanguinis effusi firmamus pignore Christi
 Minorumq; fidem, magni fundamenta Petri,
 Et tantum Latius apicem conuertimus in oris.
 At gregis electi custodia non cadet nunquam
 In caput, ô Regina, tuum, regisque profanos,
 Et minus in civilem fidei mysteria sexum.

L 2

1

From *Theatrum Crudelitatum Haereticorum
 Nostrae Temporis* (Antwerp, 1587)
 © Arata Ide

Persecutiones aduersus Catholicos à Protestantibus Caluinistis excitatae in Anglia. ⁸⁵



Post varias clades miserorum, & cadis aeternos
 Infantum, comes exornat spectata mater
 Supplicio, & Regum soror & fidelissima coniunx.
 Illa Caledony's diademate claruit oris,
 Sed micat in caelo fulgentior, inde corona
 Sanguinis, infundatq; manet in hila securis.

L 3

2

From *Theatrum Crudelitatum Haereticorum
 Nostrae Temporis* (Antwerp, 1587)
 © Arata Ide



A. Edmundus Compignus societatis Iesu sub patibulo conuocatur, statim cum Alexandro Brianto Rhenensis, et Rodolpho-Sheruino huius Collegii alimus suspenditur.
 B. Illi adhuc tepidibus car et uiscera exarabantur, et in ignem proijciuntur.
 C. Eversidua membra feruenti aqua cuscantur, tunc ad orbis terre spectant, appropinquante Elizabetha Anno M.D.LXXXI die prima Martii. Herum confusis mortis aliqui hominum nullo ad Romanam Ecclesiam diuersa sunt.

3

From Giovanni Battista de Cavalleriis,
Ecclesiae Anglicanae Trophaea
 (Rome, n.d. [1584])

© Arata Ide



Quod S. Romanae Ecclesiae fiden tenuerunt, ac praedicatorum in Anglia multi Saec. ante et laici hoc moris genere occisi sunt anno 1533. Inter quos hi fuerunt Sacerdotes, Iohannes Sheruus, Lucas Kirdicus, et Gulielmus Harris, huius Collegii alimus Robertus et Laurentius Ierosol, Gulielmus Johnsonus, Thomae Thoresclay, et Hadrianus Collegii Rhenensis alimus, Thomas Cottmanus, Iohannes Prynus, Thomas Jordest, Gulielmus Inachus. Complices obsequi in fregendo Regni praesigilli ius condemnati, talem mortem in horis excedant.

4

From Giovanni Battista de Cavalleriis,
Ecclesiae Anglicanae Trophaea
 (Rome, n.d. [1584])

© Arata Ide

註

- この論文は第44回シェイクスピア学会（2005年10月、於：日本女子大学）のセミナー「殉教史とエリザベス朝演劇」において発表した原稿に加筆修正したものである。このセミナーでは、筆者が司会を務めながら、プロテスタント道徳劇に見られる聖人劇の新たな展開について考察し、その後、大阪大学助教授・山田雄三氏がジョン・フォックスとクリストファー・マーロウの演劇について、東京農工大学教授・森祐希子氏がシェイクスピアの歴史劇と殉教史について論じた。そしてそれらの発表に続き、今は亡き畏友・小野功生氏が、内乱期までのパンフレットや演劇において殉教物語が領有されていく様子を見事に論じた。（その一部は遺作となった『ミルトンと十七世紀イギリスの言語圏』（彩流社）に収められている。）そして最後に日本学士院会員・玉泉八州男氏がエリザベス朝演劇史における「殉教者もの」の興隆の意義を論じた後、全員でそれぞれの発表について活発な議論を行った。
- 例えば David Loades, ed. *John Foxe and the English Reformation* (Aldershot: Scolar Press, 1997); David Loades, ed. *John Foxe: An Historical Perspective* (Aldershot: Ashgate, 1999); Christopher Highley and John N. King, eds. *John Foxe and His World* (Aldershot: Ashgate, 2002); David Loades, ed. *John Foxe at Home and Abroad* (Aldershot: Ashgate, 2004) を参照。

- 3 聖人劇の人気については Clifford Davidson, “The Middle English Saint Play and Its Iconography,” in *The Saint Play in Medieval Europe*, ed. Clifford Davidson (Kalamazoo, MI: Medieval Institute Publications, 1986), pp. 31-122 を参照。
- 4 このような中世的なメンタリティーについては Eamon Duffy, *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England c. 1400-c.1580* (New Haven: Yale Univ. Pr., 1992), chap. 5 を参照。
- 5 Harold C. Gardiner, *Mysteries' End: An Investigation of the Last Days of the Medieval Religious Stage* (1946; rpt. Hamden, CT: Archon Books, 1967), chap. 5.
- 6 Mark Breitenberg, “The Flesh Made Word: Foxe’s Acts and Monuments,” *Renaissance and Reformation* 25.4 (1989), 381-407, 及び Peter Happé, “The Protestant Adaptation of the Saint Play,” in *The Saint Play in Medieval Europe*, ed. Davidson, pp. 205-240.
- 7 John N. King, “Fiction and Fact in Foxe’s *Book of Martyrs*,” in *John Foxe and the English Reformation*, ed. Loades, pp. 12-35.
- 8 この時期におけるペイルの演劇活動については Paul Whitfield White, *Theatre and Reformation: Protestantism, Patronage, and Playing in Tudor England* (Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1993), chap. 1 が詳しい。
- 9 Suzannah Brietz Monta, *Martyrdom and Literature in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 2005), pp. 14-21.
- 10 *Acts and Monuments* における画像の活用については Andrew Pettegree, “Illustrating the Book: A Protestant Dilemma,” in *John Foxe and His World*, ed. Highley and King, pp. 133-144 を参照。
- 11 カトリックサイドの殉教者再生産については Anne Dillon, *The Construction of Martyrdom in the English Catholic Community, 1535-1603* (Aldershot: Ashgate, 2002) が詳しい。
- 12 David Freedberg, “The Representation of Martyrdoms during the Early Counter-Reformation in Antwerp,” *Burlington Magazine* 118 (1976), 128-138. 当時のアントワープの政治・宗教情勢については Paul Arblaster, *Antwerp and the World: Richard Verstegan and the International Culture of Catholic Reformation* (Leuven: Leuven Univ. Pr., 2004) を参照。
- 13 Richard Verstegan, *Theatrum Crudelitatum Haereticorum Nostris Temporis* (Antwerp, 1587), Allison & Rogers I, no. 1297.
- 14 Giovanni Battista de Cavalleriis, *Ecclesiae Anglicanae Trophaea* (Rome, n.d. [1584]), Allison & Rogers I, no. 944.
- 15 Richard Williams, “‘Libels and Payntinges’: Elizabethan Catholics and the International Campaign of Visual Propaganda,” in *John Foxe and His World*, ed. Highley and King, p. 208.
- 16 Patrick Collinson, *The Birthpangs of Protestant England: Religious and Cultural Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (London: Macmillan, 1988), pp.112-115. この頃の反劇場主義については William Ringer, *Stephen Gosson: A Biographical and Critical Study* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1942), pp.18-39 も参照せよ。
- 17 例えば劇場の影響力に関するスティーヴン・ゴッソンの危機意識はそれを裏付けてくれる史料であろう。Stephen Gosson, *Playes Confuted in Five Actions* (London, 1582), STC 12095, sig. F1r-v. その重要性については, Stephen S. Hilliard, “Stephen Gosson and the Elizabethan Distrust of the Effects of Drama,” *English Literary Renaissance* 9 (1979), 225-239 も参照せよ。
- 18 この点については Monta, *Martyrdom and Literature*, chap. 6、及び Marsha S. Robinson, *Writing the Reformation: Actes and Monuments and the Jacobean History Play* (Aldershot: Ashgate, 2002) を参照。
- 19 例えばデカーとマッシンジャーによる *The Virgin Martyr* (1620年上演) では、殉教者ドロシア及びセオフィルスの拷問が舞台上で行われる。そこでは異端審問のディベートは殆どなく、むしろ身体に加えられる暴力がフォーカスされる。暴力を視覚的・触覚的に再現するという劇場のリアリズムは、ジュリア・ギャスパーによれば、決して政治的目的と無関係ではなく、むしろプファルツ選帝侯フレデリックの政治的立場を支持するプロテスタント・プロパガンダに直結するという。(Julia Gasper, *The Dragon and*

- the Dove: The Plays of Thomas Dekker* [Oxford Clarendon Pr., 1990], chap. 5.) つまりこの劇では、神聖ローマ帝国のカトリック支配がローマ皇帝ディオクレティアヌスに重ねられ、迫害されるプロテスタントがドロシアに重ねられており、拷問場面の視覚的リアリズムは観客の同情と恐怖を煽って、当時のヨーロッパにおけるプロテスタントの政治政策について、好意的な世論を形成するための仕掛けになっているというのだ。殉教者物語が劇場の身体表現力と手を結び、有効な政治的プロバガンダとなるという例であろう。しかしプロテスタントの政治的プロバガンダとしてみることができると言える *The Virgin Martyr* も、凄惨な殉教者物語が恋物語と抱き合わせになるという奇妙な現象が生まれている。特にアントニーヌスの中に燃えているドロシアに対する “wanton heat” が、ドロシアの殉教により、なくなるのではなく “holy fire” へと変換されて、アントニーヌスが聖人としてドロシアの後を追うという点は興味深い。つまりこの劇では、肉欲的渴望と宗教的渴望とが容易に交換可能であり、殉教者の聖性とは、相手が神であれ人であれ、愛によって受ける苦悶に置き換えられそうなのだ。こういった傾向はジョン・ウェブスターの *The Duchess of Malfi* にも見られる傾向だと思われるが、ここにいたって演劇は、フォックスが様々な社会階層からプロテスタント殉教者を創造したのと同じように、様々な形の聖性を帯びた英雄を創造しはじめたと言える。
- 20 *The Conflict of Conscience 1581*, Malone Society Reprints, prepared by Herbert Davis and F. P. Wilson (Oxford: Oxford University Press, 1952), xiii. *The Conflict of Conscience* からの引用及び引用行数はこの版に拠った。
 - 21 Celesta Wine, “Nathaniel Woodes: Author of the Morality Play *The Conflict of Conscience*,” *Review of English Studies* 15 (1939), 458-63.
 - 22 以下の論の大筋は Arata Ide, “Nathaniel Woodes, Foxeian Martyrology and the Radical Protestants of Norwich in the 1570s,” *Reformation* 13 (2008), 103-132 に拠る。
 - 23 例えば次のような研究が挙げられる。Robert G. Hunter, *Shakespeare and the Mystery of God’s Judgments* (Athens: University of Georgia Press, 1976), chap. 2; Martha Tuck Rozett, *The Doctrine of Election and the Emergence of Elizabethan Tragedy* (Princeton: Princeton University Press, 1984), pp.103-107; Rowland Wymmer, *Suicide and Despair in the Jacobean Drama* (Brighton, Sussex: Harvester Press, 1986), pp.20-25; John S. Wilks, *The Idea of Conscience in Renaissance Tragedy* (London: Routledge, 1990), pp.59-67; John Stachniewski, *The Persecutory Imagination: English Puritanism and the Literature of Religious Despair* (Oxford: Clarendon Press, 1991), pp.300-302.
 - 24 イングランドにおけるフランシス・スパイア物語の受容については以下の文献を参照。Brian Opie, “Nathaniel Bacon and Francis Spiera: The Presbyterian and the Apostate,” *Turnbull Library Record* 18 (1985), 33-50; M. A. Overell, “The Exploitation of Francesco Spiera,” *Sixteenth Century Journal* 26 (1995), 619-37; Michael MacDonald, “The Fearefull Estate of Francis Spira: Narrative, Identity, and Emotion in Early Modern England,” *Journal of British Studies* 31 (1992), 32-61.
 - 25 Matteo Gribaldi, *A Notable and Marueilous Epistle of the Famous Doctor, Mathewe Gribalde*, trans. E. A. (London, c.1570), *STC* 12366, sig. A5v.
 - 26 Leslie Mahin Oliver, “John Foxe and *The Conflict of Conscience*,” *Review of English Studies* 25 (1949), 3.
 - 27 このような見方をとする研究としては、David M. Bevington, *From Mankind to Marlowe: Growth of Structure in the Popular Drama of Tudor England* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1962), p. 260.
 - 28 Gribaldi, *A Notable and Marueilous Epistle*, sig. C1v.
 - 29 D. R. Woolf, “The Rhetoric of Martyrdom: Generic Contradiction and Narrative Strategy in John Foxe’s *Acts and Monuments*,” in *The Rhetoric of Life Writing in Early Modern Europe*, ed. Thomas F. Mayer and D. R. Woolf (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1995), pp.259-60.
 - 30 Monta, *Martyrdom and Literature*, p. 13.
 - 31 殉教者の「良心」がフォックスの *Actes and Monuments* や演劇作品においていかに重要かということについては、Robinson, *Writing the Reformation*, chap. 3 を参照。

- 32 Tom Betteridge, "From Prophetic to Apocalyptic: John Foxe and the Writing of History," in *John Foxe and the English Reformation*, ed. David Loades (Aldershot: Scholar Press, 1997), pp.216-17.
- 33 Oliver, "John Foxe," 2.
- 34 Wine, "Nathaniel Woodes," 460.
- 35 Ide, "Nathaniel Woodes," 114-115.
- 36 Matthew Reynolds, *Godly Reformers and Their Opponents in Early Modern England: Religion in Norwich c. 1560-1643* (Woodbridge: Boydell, 2005), pp. 45-47.
- 37 John Bruce and Thomas Thomason Perowne, eds. *Correspondence of Matthew Parker* (Cambridge: Cambridge University Press, 1853), p. 429.
- 38 R. A. Houlbrooke, ed. *The Letter Book of John Parkhurst Bishop of Norwich Compiled during the Years 1571-5* (Norwich: Norfolk Record Society, 1975), pp.195-96, 210-211.
- 39 Albert Peel, *The Brownists in Norwich and Norfolk about 1580* (Cambridge: Cambridge University Press, 1920), pp.1-6.
- 40 急進派の「劇的」な危機については、A. Hassell Smith, *County and Court: Government and Politics in Norfolk 1558-1603* (Oxford: Clarendon Press, 1974), pp.208-25 を参照。また Patrick Collinson, *The Elizabethan Puritan Movement* (1967; rpt. Oxford: Clarendon Press, 1990), pp.202-204、及び Muriel C. McClendon, *The Quiet Reformation: Magistrates and the Emergence of Protestantism in Tudor Norwich* (Stanford: Stanford University Press, 1999), pp.237-46 も見よ。
- 41 この現状については Houlbrooke, *Letter Book*, 99、及び John Strype, *The Life and Acts of Matthew Parker*, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1821), 2: pp.85-89 を参照。
- 42 こうした急進派の傾向を Peter Lake も同じように指摘している。"Presbyterianism, the Idea of a National Church and the Argument from Divine Right," in *Protestantism and the National Church in Sixteenth Century England*, ed. Peter Lake and Maria Dowling (London: Croom Helm, 1987), p.206.
- 43 *The Protestatyon of Martin Marprelat* ([Haseley ?, 1589]), *STC* 17459, p.4.
- 44 Damian Nussbaum, "Whitgift's 'Book of Martyrs': Archbishop Whitgift, Timothy Bright, and the Elizabethan Struggle over John Foxe's Legacy," in *John Foxe: An Historical Perspective*, ed. David Loades, pp.135-153.